



大木義徳

大木義徳 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターの協働実践研究プログラムのプレフォーラムにお越しいただきましてありがとうございます。私は本日の司会を務めます本センター研究員の大木義徳です。

私ども「阿部・井上班」では長野県上田市と協働で外国人労働者および外国につながる児童・生徒をめぐる課題の解決に向けて、企業・行政・市民の連携の在り方について検討を行っています。外国人を雇用する企業や学校、日系人コミュニティなどにおいてヒアリングを行っているほか、地域活動にも参画するといった形で活動しています。本日はその活動

の一端をご紹介します。プログラムは「日系ブラジル人を取り巻く課題と地域づくり」をテーマに第1部と第2部になっています。第1部では「日系ブラジル人の仕事・暮らし・教育」と題して在住のブラジル人の2人を迎えた鼎談を、第2部では「上田市はどう取り組んできたか」と題したパネルディスカッションです。

鼎談に入る前に、本センターの副センター長・伊東祐郎、当大学特任研究員の阿部裕と井上洋より一言ご挨拶を申し上げます。

伊東祐郎 本センターは、2006年4月に設立されました。その前に、私どもは文科省の現代GP（グッドプラクティス）というプログラムの中で、「多文化コミュニティ教育支援室」を設立し、学生のボランティア活動、地域貢献ということで活動をしてきました。その中でいろいろなことが見いだされました。

例えば、外大だと外国語を学ぶということで、どうしても視点が海外に向いてしまうのが一般的な傾向ですが、地域のボランティアをすることによって、学生が内なる国際化だとか、多言語・多文化化する社会をより強く感じ、自分たちの社会観などをいろいろな角度から考える機会を得ることができました。

そして、この学生の興味、関心をそのままにしておくのはもったいないということで、新たに現代GPの3年間のプログラムが終わる直前にこのようなセンターを立ち上げ、いわゆる教育、研究、社会貢献の3分野において、刻々と変化する多言語・多文化社会、今の日本のさまざまな状況に取り組んでいけるような人材養成と社会貢献ができないかというようなことを趣旨として設立いたしました。

● 3本柱のミッション

多言語・多文化研究センターのミッションは、3本の柱から成っています。

ひとつは「教育」。私どもは学部学生を含めて、いわゆる多言語・多文化社会に求められる人材養成ということ、大学の第一本分である教育活動の重要課題として、大事にするということ、大きな目的としています。

2つ目は「研究活動」。これは大学の研究者、実践者と、学外の研究者、実践者が手を組んで、そして共同で今後の日本社会の在り方を模索し、人材育成と社会の在り方について教育、研究できたらということです。

学生と社会、子ども、そして私たち研究者と実践者で構築しているこのネットワークを十分に活用できないものか、同時にそれを社会貢献につなげられたらということで、3本目の柱として「社会連携活動」を立てました。この3つがセンターの大きな柱ですし、どの1本が欠けても成り立たないという考えでやっています。

そして今日のこのプレフォーラムは、社会連携というものにかかわってきますが、協働研究のひとつの活動の一環とご理解いただきたいと思います。

私たちはどんどん発信をしていきたい、そして勉強もしていきたいということで、これまでの協働実践で培ってきたものを本にまとめています。設立して1年半しかたっていません。しかし、社会の動きと共に、私たちの活動もこの1年半の間に目まぐるしく動いております。今後とも皆様方からのご支援とご協力、そして一緒に取り組んでいくことを通して、私たちの活動、今後の日本の社会を担う学生、そして人材を育成していきたいと思っております。ご支援、ご協力のほどよろしく申し上げます。

阿部 裕 皆様こんにちは。普段は東京・四谷の精神科クリニックで患者を診ています。外国の人たちを中心に診ていますが、1年に100人以上になると思います。そういう中で、最近は幼稚園あるいは小学校、中学校ぐらいの外国籍の子どもたちがクリニックを受診するようになってきました。そういう子どもたちを見ていて、いろいろな問題を抱えても実際に住んでいる地域でどういうふうな生活を送っているかなどの実態はあまり分かりませんでした。



伊東祐郎



阿部 裕

そんな時、協働実践研究に参加できることになって、実際にそういう子どもさんたちが住んでいる地域はどうなっているのかという調査をやりましょうということになりました。

どの場所にするかというときに、大きい企業があって、外国人が集住はしているが、大人数ではないこととか、さまざまな要件で上田市がいいだろうということになり、今回は上田市を取り上げて、どういうふうな状況になっているかということ調べることになりました。調べるだけではなく、実際にそういうお子さんたちに対する支援がどうできるのか、あるいは心の問題が起きないようにどう予防ができるのかということを実践的に推進していこうということ参加させていただきます。皆様方のいろいろなご意見もお聞きしたいと思しますので、よろしく願います。

井上 洋 皆さん、こんにちは。私自身は日本経団連という経済団体で外国人問題の担当をここ数年しています。経団連は大企業が参加している団体で、直接的に現場の労働者として外国人を雇っている企業は非常に少ないです。しかし実際には、例えば自動車にしても、電機にしても、製品が作られる過程において、外国人の手によって作られるというプロセスについては、経団連の会員企業トップにも相当認識されています。



井上 洋

そこで、地域における受け入れの体制についても経団連で意見を言っていくべきだということで、04年と07年に2回と計3回にわたり提言をしました。

そうした中で私自身、各地を歩いてみました。かねてよりたくさん外国人が集住している都市ではそれなりの施策がなされてきているという感じがしましたが、比較的最近、外国人が居住し始めた都市では、ずいぶんと状況が違うように思います。今回、長野県の上田市という都市でいろいろ調べてみますと、グローバル競争に直面している日本企業の事業戦略、人事戦略がものすごく大きく変わる中で外国人雇用の形が変わってきているのがよく分かりました。

小さな町で比較的同じような業態で、しかも同じような形で外国人を活用している企業をヒアリングして、そこから見えてくるものを東京外大のこの研究に生かしたいし、私自身も日本経団連の取り組みに生かしたいということもあります。本日は、日系人の生活面、あるいはその子どもたちの教育の問題などをどういう形でとらえ直すかを考えていきたいと思っています。